第44回シナリオS1グランプリ

部門 ②

ぐるぐるまわる

桐乃さち

あらすじ

精神科医の園田春香(２８)は、大病院の機械的に人を診断するやり方に疲れていた。

そんな春香の唯一の癒しは、近所のコインランドリーに住み着いている野良猫に餌をやる事と、そこにやって来る遠山賢人(３６)との会話。春香は密かに遠山に恋をしていた。

春香の患者、遠山美織(３５)は会社の上司と不倫し、それがきっかけでうつ病になった。美織の診察に同席した夫は、遠山だった。春香はとっさに初対面の振りをする。

遠山は美織の不倫を疑っており、今は別居していると言う。美織は春香に、遠山と離婚したくないと相談する。春香は、もう遠山に会わない方がいいのかと思い悩む。

春香は末期癌で入院している父の見舞いに訪れる。余命わずかの父から、母親の不貞行為について聞かれる。春香は子供の頃に、母の不倫相手と会った事があった。妻の不貞行為を知りたがる父と、遠山の姿が重なる。

東京に台風が上陸した日。猫が心配でコインランドリーへ行くと、遠山がいる。遠山は、美織の不倫の事実を確かめる事が出来れば、気持ちの整理が付き、離婚出来ると言う。春香は医師としての立場を忘れ、全てを話してしまいたい衝動に駆られるが、踏みとどまる。

一方美織は、不倫相手と体の関係が続いており、妊娠してしまう。美織は遠山と性交渉を持ち、遠山の子供として産んで育てると言う。春香は止めるが、聞かない美織。

父が危篤状態に陥る。春香は母に、不貞行為を父親に告白するように迫る。しかし、母は頑として認めないどころか、「長い時間かけて育った執着みたいな、汚れみたいなものを、愛情って呼ぶんじゃないの？」と開き直る。

父は亡くなる。春香は、父に真実を話せなかった事を深く後悔する。

春香は遠山に、美織の不倫と妊娠の事を話してしまう。遠山は美織に離婚を切り出し、美織は自殺未遂。子供は流産する。

自分のせいで美織を追い詰めてしまった事に苦しむ春香。医師を辞めようとするが、それは逃げであり、精神科医として美織を救う事が唯一の贖罪になると思い直す。春香は美織と遠山の夫婦関係修復に助力し、遠山とは決別する。

7年後。春香は個人経営の病院で、より患者に寄り添う形で医師を続けていた。街中で遠山を見かける。美織との間に子供が産まれ、幸せそうな姿。

春香は遠山への想いを断ち切るように、前を向いて歩き続ける。

人物表

園田春香（２８）（３５） 精神科医
園田春香（５） 幼稚園児
遠山賢人（３６）（４３） 会社員
遠山美織（３５）（４２） 春香の患者
園田修平（６２） 春香の父
園田涼子（３０）（５３） 春香の母
浅川実（５３） 春香の上司
二ノ宮達也（３６） 春香の患者
鈴木千尋（５３） 主婦
夏生陽子（４２） 看護師
柘植麻里（３４） 主婦
柘植徹（４０） サラリーマン
男の子（５）
アナウンサー
医師
看護師１
看護師２
看護師３

○緑ヶ丘遊園地　メリーゴーランド前

こじんまりとした遊園地。

ピエロが赤い風船を配っている。

園田春香(5)、メリーゴーランドに乗っている。

園田涼子（３０）と、男性（顔は見えない）が乗り物の外で見ている。

春香、涼子に向かって手を振る。

○メインタイトル「ぐるぐるまわる」

○私立南里大学病院　外観

大きな病院。

「私立南里大学病院」と書かれた看板。

○同　精神病棟　外来　診察室　前

ベンチにはたくさんの人が座っている。「診察室」と書かれたドア。

○同　診察室　中

清潔感のある部屋。
春香(２８)、パソコンの前に座っている。
二ノ宮達也(３６)、春香の向かいに座っている。二ノ宮、スマホを握り締めている。
二ノ宮「また、やってしまったんです……」
春香、二ノ宮の持つスマホを見つめる。
二ノ宮「満員電車に乗ると、だめなんです……。泥酔している女性をつい……」
春香「前回の診察では、車通勤に変えるとおっしゃっていましたが」
二ノ宮「会社にばれて禁止されました。先生、衝動を抑える方法は無いんですか？」
春香、眉を寄せて考え込む。パソコン画面に、「残り3分」と表示される。
春香「夜は眠れていますか？」
二ノ宮「あんまり……」
春香「お薬、変えてみましょうか」
二ノ宮「妻は私がまだやってるんじゃないか

って疑っているんです。こうして病院に通っている事も内緒にしていて……」

パソコンに「残り1分」と表示される。

二ノ宮「いっそ、本当の事を話して治療に協力してもらった方がいいんでしょうか」

春香、口を開きかけるが、パソコン画面に「診察時間終了」と表示される。

○同　ナース室（夜）

夏生陽子（42）と春香が話している。

陽子「今日も2時間押しです」

春香「だけど、患者さんによっては、じっくり話を聞いてあげたい人もいるんです。一人15分だと……」

陽子「病院の方針ですからね」

春香「なんだか流れ作業みたいで」

陽子「入院患者様の対応もありますし、看護計画にも影響が出ますから」

春香「はい、すみませんでした」

春香、ため息をつく。

○道（夜）

春香、自転車で走っている。

○コンビニ　店内（夜）

春香、猫のご飯を手に取る。

○住宅街　コインランドリー　前（夜）

「２４時間営業」と書かれた店。

春香、自転車を止め、コインランドリーに入る。

○同　コインランドリー　中（夜）

小さな店内。誰もいない。春香が入ると、奥から子猫が走って来る。

春香「お腹減った？　ちょっと待っててね」

春香、紙皿に餌を出す。春香、壁の時計を見つめる。時計は８時を指している。春香、ちらちらとドアを見る。ドアの外に人影が現れる。春香、慌ててドアから目を逸らし、顔を伏せて猫を

撫で始める。
ドアが開き、洗濯物を持った遠山賢人（３６）が入って来る。春香、振り向いて会釈をする。遠山も会釈をする。
遠山「あれ」
春香「どうも」
遠山「また先を越されちゃったか」
遠山、猫を撫でてから洗濯機に洗濯物を入れ始める。
遠山「こいつ、追い出されない所を見ると、この店のオーナーも猫好きなんですかね」
春香「か、かもしれませんね」
春香、落ち着かない様子で前髪を直す。
遠山、春香の隣にしゃがみ込む。
遠山「俺も飯買ってきたんだけどな」
春香「すみません」
遠山「いや、明日の朝にでもまた来ます」
春香と遠山、目が合い、ぎこちなく笑い合う。遠山、猫を撫でる。
遠山「いい人に世話してもらって良かったな、

お前」

春香「私が飼えたらいいんですけど。うちのアパート、動物だめなんです」

遠山「ですよね。いっそ、ポスターでも貼りますか。この子、飼って下さいって」

春香「あ！ それ、いいですね。私、今度描いて来ます」

遠山「本当？ じゃあ俺、オーナーさんに貼っていいか聞いてみますよ」

春香「え、いいんですか？」

遠山「こいつの為ですから。興居島って知ってますか？」

春香「え？」

遠山「興居島。愛媛県にある小さな島なんですけど」

春香「あ、いえ、知りません」

遠山「ですよね。俺、そこ出身なんですよ」

春香「そうなんですか」

遠山「いい所ですよ。海が綺麗でのんびりしていて。コンビニも信号もなんもない所だ

けど」

遠山、猫を撫でる。

遠山「こっち引き払って、帰ろうかと思ってるんです」

春香「えっ」

遠山「そしたら、こいつも一緒に行けるんだけど」

春香、寂しそうな顔。

遠山「もしそうなったら、遊びに来てくださいよ」

春香「え」

遠山「こいつも寂しがるし。な？」

猫が鳴く。

○同　コインランドリー　前（夜）

春香、自転車にまたがる。振り返ると、遠山が手を挙げている。春香、会釈をして走り去る。

○同　坂道（夜）

春香、笑顔で自転車を漕いでいる。勢いよく坂道を下る。

○春香の自宅　前（夜）

「レジデンスすみれ」と書かれた小さなアパート。春香、鼻歌を歌いながら外階段を上る。

○同　リビング（夜）

きちんと片付いた小さな部屋。春香、鼻歌を歌いながらベッドに倒れ込む。

○（イメージ）興居島　海

透き通った海。

○（イメージ）同　海沿い　家　テラス

海沿いにある小さな家。テラスで猫がのんびりしている。

遠山が昼食の支度をしている。そこに自転車でやってくる春香。

遠山と仲睦まじい様子。

○春香の自宅　リビング（朝）

目覚まし時計の音。

ベッドで寝ていた春香が目を開け、あくびをしながら洗面所へと移動する。

机の上にあるパソコン、マウス。春香が通り過ぎる時にマウスが動く。パソコン画面には興居島の検索結果が表示される。

○私立南里大学病院　外観（朝）

○同　精神病棟　外来　診察室　中（朝）

春香、一人パソコンの前に座っている。パソコン画面にはカルテが表示されている。「遠山美織」「うつ症状」と表示されている。春香、「呼び出し」ボタンを押す。「診察時間　残り１５分」と表示される。ドアがノックされ、遠山

美織(３５)が、入って来る。
美織「先生、あの。実は今日、主人が同席したいと言ってまして」
春香「あぁ。そうですか。大丈夫ですよ」
美織「いえ、あの」
美織、ドアをちらちら見る。
美織「実は言ってなかったんですが、主人とは今、別居してまして」
春香「えっ、そうでしたか」
美織「それで……、あのことは主人には言わないで欲しいんです」
春香「……」
美織、春香に顔を寄せて小声で話す。
美織「私が、会社の上司と関係していた事」
美織、ドアを気にしている。
美織「主人には、私が通院しているのは仕事でのストレスって言うことにしているので」
春香「なるほど」
美織「主人すごく神経質で、私が病気になったのは何か他に原因があるんじゃないかっ

て疑っているんです」

春香「(頷く)」

美織「別居もそれが原因で……。主人、私が不倫していたことを知ったら、また離婚するって言い出すかもしれません」

春香「分かりました。大丈夫ですよ、遠山さんの相談内容は、伏せてお話させていただきますから」

美織、安心したように息をつく。

美織「じゃあ、主人を呼んで来ます」

美織、部屋を出て行く。すぐにノックの音がする。

春香「はい、どうぞ」

春香、パソコン画面を見つめている。

春香「どうぞ、お座りください」

春香、顔を上げる。美織の後ろに遠山が立っている。春香、目を見開く。遠山も目を見開く。春香、唾を飲み込む。

春香「あ……」

春香、動揺して資料を落としてしまう。

美織「先生？」
春香「いえあの、こちらお座りください」
美織の隣に遠山が座る。
遠山、口を開きかける。
春香「初めまして。遠山さんの担当医の園田と申します」
遠山「……遠山です」
春香「本日は？」
遠山「妻の具合がどうなのか気になりまして」
春香「体調面、私からお話させていただいてよろしいですか？」
美織「はい」
春香、美織を安心させるようにアイコンタクトをする。
春香「最近は落ち着かれてきていますね。眠れるお薬は継続していきますが、安定剤の方はそろそろ少なくしていってもいいかもしれません」
遠山「仕事には復帰するの？」
美織「……出来れば」

遠山「先生はどう思われますか？」
春香「遠山さんのお気持ち次第ではあるのですが」
遠山「会社に行くと症状が悪化するんじゃないかと思うんです」
春香「……」
遠山「妻のストレスの原因」
　美織、ぎくっと体を強張らせる。
遠山「先生は何だとお考えですか？」
春香「やはりお仕事がお忙しいのが一番の原因だったんじゃないかと思います。ですので、もし復帰される場合は別の部署へ異動されるとか」
遠山「そうじゃなくて」
　遠山、挑むように春香を見つめる。
遠山「先生もご存じのように、会社での人間関係が原因だと思ってるんです」
　春香、パソコンを見つめる。「残り１３分」と出ている。
遠山「そうだよね？」

美織「いや……」
遠山「俺は、退職した方がいいと思う」
春香「……」
春香、パソコンを見つめる。「残り１３分」の表示のまま。
春香「まだ休職期間が残っていますので、考える時間はありますよ」
遠山「休職期間が終わったら、復帰せずにそのまま辞めたら？」
美織「でも新卒の時からお世話になってるし」
遠山「あの部長にだろ」
美織、強張った顔で黙り込む。
春香、パソコンを見つめる。「残り１３分」の表示を見つめる。
ようやく「残り１２分」になる。
遠山「先生、妻のストレスは、本当に多忙が原因ですか？」
春香「……」
遠山「妻は」
春香「申し訳ありません。患者様のご相談内

容については、お身内の方にもお話する事は出来ないんです」

遠山「……」

春香「旦那様には一度退室いただいて、診察を続けさせていただいてもよろしいでしょうか？」

遠山、しばらく春香を見つめるが、黙って出て行く。春香、ほっと息をつく。

美織、泣き出す。

美織「夫は離婚届を書いてるんです」

春香、黙ってティッシュを差し出す。

美織「本当の事を話さない限り、君とは暮らせないって。夫は出て行ってしまって……」

美織、泣き続ける。

美織「私、不倫したことは夫に知られたくないんです。離婚もしたくない……。どうしたらいいんでしょうか」

春香、じっとドアを見つめる。

○住宅街　コインランドリー　前（夜）

春香、自転車に乗ってやって来る。籠の袋にはキャットフード。

春香、そっと中を見る。ガラス戸には人影が映っている。ドアが開く。春香、急いで自転車で走り出そうとする。

コインランドリーからはカップルが出て来る。

春香、ほっと肩を撫でおろす。カップル、不思議そうな顔で去って行く。

春香、コインランドリーに入る。

○同　コインランドリー　中（夜）

数台の洗濯乾燥機が稼働しているが人はいない。

春香「にゃあ」

猫が出て来る。春香、ホッとしてしゃがみ込む。

春香「遅くなってごめんね」

紙皿にキャットフードを入れる。

猫が食べ始める。春香、周囲を見回す。

ドアが開く音。
春香が振り返ると遠山が立っている。
春香、はっとして立ち上がる。
遠山「あ、やっぱり。自転車があったので」
春香「し、失礼します」
遠山「ちょっと」
春香、遠山の横を通って外に出ようとする。遠山、思わずその腕を掴む。
遠山「あ、すみません」
春香「先日は失礼しました。まさか、あの」
遠山「こちらこそ、みっともない姿、見られちゃいましたね」
春香「すみません。患者様のご家族とは知らなかったので」
遠山「俺もびっくりしました」
春香「私そろそろ……」
遠山「え」
春香「失礼します」
春香、外に出る。

○同　コインランドリー　前（夜）

春香、慌てて自転車にまたがる。

遠山の声「恥の上塗りになるかもしれないけど、みっともないついでだから」

春香、振り向くと遠山が立っている。

遠山「妻の事、教えてもらえませんか？」

春香「申し訳ありませんけどそのお話は」

遠山「俺は本当の事が知りたいだけなんです。もちろん、先生から聞いただなんて、誰にも言いません」

春香「すみません。患者様に関する事は、勝手にお話する事は出来ないんです」

遠山「待って下さい」

春香「……」

遠山「すみませんでした。僕とこうやって話すだけでも、職務規定違反ですか？」

春香、迷うように俯く。

遠山「だったらまたここに来てください。あいつが寂しがりますから」

春香と遠山、見つめ合う。

○春香の自宅　玄関　中（夜）

春香、走り込んで来る。

大きくため息をつく。

○同　リビング（夜）

机の上に、猫の飼い主を探す手作りのチラシがある。春香、それを見つめる。

○花屋　店頭

色とりどりの花々が並んでいる。

春香、吟味して抜き取って行く。

○東京都立癌センター　外観

「東京都立癌センター」と書かれた大きな病院。

○同　ホスピス病棟　廊下

花束を持った春香が歩いている。

廊下に「ホスピス病棟」と書かれたプレート。

「園田修平様」と書かれたプレートのある病室。
春香、ノックしてドアを開ける。

○同　病室
ベッドがある広めの個室。
園田修平（６２）がベッドで本を読んでいる。春香、部屋に入る。

春香「お父さん、おはよう」
園田「おう」
春香「何読んでるの？」
園田「村上春樹」
春香「えー、意外」
園田「純文学の一つも読まずに死ぬなんて、なんてな」
春香、複雑な顔。
春香「……面白い？」
園田「いんや。あしたのジョーが読みたい」
春香「ふふ、今度持って来るよ」
園田「悪いな。でもあれは名作だから」

春香、花瓶を手に取り、洗面所へ行く。

○同　洗面所

簡易的な洗面所。

春香、花瓶に水を入れる。赤と青、二つの歯ブラシがあるのに気が付く。

○同　病室

園田、熱心に本を読んでいる。春香、花瓶に花を飾る。

園田「あぁ、綺麗だな。ありがとう」

春香「お母さん、結構来てるの？」

園田「うん」

春香「家に帰ったらいいのに」

園田「夜中に何かあったら困るだろ」

春香「お医者さんはなんて？」

園田「んー、まあな」

春香、ため息をついてその辺の棚を拭いたりする。

春香「それ、どんな話なの？」

園田「うーん、事故で観覧車に閉じ込められた女性がそこから自分の部屋を覗いてみると、もう一人の自分がいるって話だな」
春香「へぇ、面白そう。もう一人の自分って何してたの？　ドッペルゲンガー的な？」
　春香、掃除を続ける。
園田「遊園地って言えばほら、緑ヶ丘遊園地ってあったよな」
春香「緑ヶ丘遊園地？」
園田「覚えてないか？　まだ小学校上がる前だったかな、ちょっとだけ住んでた団地の近くにあっただろ」
　春香、ふと手を止める。
春香「あぁ、観覧車が緑の？」
園田「行ったことあるだろ？」
春香「どうだっけ」
園田「覚えてないか？」
春香「幼稚園の遠足で行ったんだっけ」
園田「そうじゃなくて」
　春香、園田を振り返る。

園田、春香をじっと見つめている。
園田「お母さんと一緒に行ってただろ」

○（フラッシュ）緑ヶ丘遊園地
メリーゴーランド、小さなジェットコースター、緑色の観覧車。

○東京都立癌センター　ホスピス病棟　病室
園田、春香を見つめている。
春香「そうだったっけ」
園田「その時に一緒にいた人の事覚えてないか？」
春香「一緒にいた人？」
園田「お母さんの友達と一緒にいただろ」
春香、園田に背中を向けて花を直す。
その手が微かに震えている。
春香「どうだったかな」
園田「……」
春香「家族でも行ったよね」
園田「いや、行ってない。転勤が決まって引

っ越しちゃったからな」
春香「そうなんだ」
園田「お母さんの友達、どんな人だったか覚えてないか？」
春香「どうだっけ。お母さんと2人だったんじゃないかな。何でそんな事知りたいの」
園田「あの時期、お母さんが別の人と付き合ってたんじゃないかと思ってるんだ」
春香「！」
園田「どうだ？」
春香「知らないよ……。何でそんなこと私に聞くの」
園田「知りたいんだよ」
春香「お父さんの勘違いじゃない」
園田「思い出してくれよ。冥土の土産にさ」
春香「ちょっともう、そう言う事言うのやめてよ」
春香が振り返ると、園田は苦い顔で本に目を落としている。
春香「……あしたのジョー持って来るから」

春香、ぎこちなく微笑む。

○私立南里大学病院　精神病棟　診察室

春香と美織が話している。

美織「やっぱり夫に本当の事を話した方がいいんじゃないかと思うんです」

春香「……」

美織「家族だから」

春香、何を言おうか迷っている。

○同　廊下（夕）

春香、窓の外を見つめている。雨が降っている。浅川実（５３）が来る。

浅川「降って来たね。電車が止まらないうちに帰った方がいいよ」

春香「はい。先生は当直ですか」

浅川「うん」

春香「大変ですね」

浅川「こんな日は、逆に泊った方が楽なんだ」

春香「あの、患者さんの担当って」

浅川「え？」
春香「変えてもらった事、ありますか？」
浅川「何かあったの？」
春香「……」
浅川「あるよ。一度、患者様から特別に好意を持たれた事があってね」
春香「そうなんですか？」
浅川「僕が帰る時間に合わせて、同じ電車に乗ってきたり、待ち伏せされたりね」
春香「……」
浅川「その時は変えてもらった。その方が患者様にとってもいいと思ったから」
春香「そうなんですね」
浅川「だから、相談には乗れると思うよ」
春香「ありがとうございます」
浅川「それと、僕からも相談があるんだけど」
春香「はい？」
浅川「園田先生はこのまま、大学病院に勤め続けたいと思ってる？」
春香「え？」

浅川「実は、僕の知り合いの病院で、後継者不足だから医師を派遣してくれないかって話があるんだ。将来はその病院を継いでくれる事を前提に」

春香「……」

浅川「園田先生は大きい病院より、もっと患者さんと距離が近い方がやりやすいんじゃないかと思ってね」

春香「あの」

浅川「あ、もちろんすぐに答えなくていいから。ちょっと頭の片隅に置いといてくれる？」

春香「はい、ありがとうございます」

窓の外、雨が激しくなっている。

○春香の自宅　リビング（夜）

窓の外は大雨、激しい風。

春香、ぼんやりとテレビを観ている。

テレビでは台風情報をやっている。

アナウンサーの声「今回の台風は未曽有の被

害をもたらす可能性があります。土砂崩れや川の氾濫に、十分警戒して下さい」

春香、机の上の猫の飼い主募集のチラシを見つめる。

窓の外の嵐を見つめる。

○住宅街　道（夜）

合羽を着て傘を持った春香、歩いている。コインランドリーが見える。外に、しゃがんでいる遠山がいる。

春香、はっとして電柱の陰に隠れる。

○同　コインランドリー　前（夜）

腕の中に子猫を抱いている遠山。子猫は怯えて鳴いている。子猫が逃げないように抱いている為、傘を差せず、ずぶ濡れになっている。

○住宅街　道（夜）

春香、電柱の陰に隠れて遠山を見てい

る。そっと踵を返してその場を離れる。

○春香の自宅　玄関　中（夜）

ずぶ濡れの春香が帰って来る。春香、肩で息をしている。

○住宅街　コインランドリー前（夜）

ずぶ濡れの遠山が、子猫を抱いている。

遠山「大丈夫だよ」

遠山の周りが影になる。遠山が振り返ると、合羽を着た春香が傘を差し出している。春香の手には新しいタオル。

遠山「ありがとう」

春香「どうしたんですか」

遠山「こいつ、怖いみたいで外に出ようとするんだ。家に連れて行ってもいいかな」

春香「えっ」

遠山「ここ、裏が崖になってるから土砂崩れが心配で」

春香「大丈夫なんですか？」

遠山「一晩だけなら」
春香「あの、お家どこですか？」
遠山「え？」
春香「ついて行きます」
遠山「でも」
春香「だって一人じゃ……。傘も差せないし」
遠山「いいんですか？」
春香「行きましょう」
猫を抱いた遠山。傘を差す春香。

○同　道（夜）
土砂降りの中、猫を抱いた遠山と春香が歩いている。風が強く、春香の差している傘が煽られる。遠山、春香に猫を渡し、春香の傘を受け取って差す。
春香が濡れないようにしている。

○遠山の自宅　外観（夜）
単身者用のアパート。

○同　玄関　中（夜）

春香が玄関先に座っている。がらんとしたワンルームの部屋。リビングで、遠山が猫に餌を食べさせている。

遠山「食ってます」

春香「良かった」

春香、立ち上がって傘を持つ。

遠山「送って行きます」

春香「いいんです、すぐそこだから」

遠山「待って」

遠山、部屋の鍵を持ってやって来る。

遠山「危ないですから」

遠山に促されるように外に出る春香。

○住宅街　道（夜）

雨の中、春香と遠山が歩いている。

遠山「やっぱり先生だからかな、話しやすい雰囲気あるんですよね」

春香「……お話を聞くのが仕事なので」

遠山「じゃあ独り言、いいですか」

春香「……」

遠山「あの部屋は仮住まいなんです。荷物は必要最低限で出てきてしまったから」

春香「……」

遠山「仕事は営業をしていますけど……、教員免許を持っているので、地元に帰って非常勤講師でも出来たらいいなって」

春香「……はい」

遠山「だから本当の事を知ってすっきりしたら離婚して……、早く帰りたいです」

春香「あの」

遠山「あ、良かった。土砂になってなかったですね」

いつの間にか、コインランドリーの前に着いている。

遠山「明日またここに戻さないといけないと思うと心苦しいですね」

コインランドリーを見つめる遠山を、見つめる春香。

○本屋　前　歩道（朝）
雨上がりの道。
歩道に面した本屋。

○同　店内（朝）
春香、精神医学についての本を探している。
春香、レジに向かう途中でガイドブックコーナーを見つける。愛媛の本を取ってパラパラとめくる。興居島の紹介ページをじっと見つめる。

○私立南里大学病院　精神病棟　診察室
春香と美織が話している。美織は時折目元を拭っている。
美織「彼とは、大学生の時に私から一目ぼれして付き合いました……」
春香、頷きながら聞いている。
美織「やっぱり浮気の事、話そうかと思うんです」

春香「お話されるんですか……」
美織「だって、彼は知りたがってるんです。
ちゃんと話して、謝ったらきっと……」
春香、じっと考える。

○(フラッシュ)住宅街　道（夜）
雨の中、遠山と春香が話している。
遠山「だから本当の事を知ってすっきりしたら離婚して……、早く帰りたいです」

○元の私立南里大学病院　精神病棟　診察室
春香と美織が話している。
美織「先生、どう思いますか？」
春香「……話して、変わってしまう事もありますよね」
美織「はい……」
春香「家族だとしても……、秘密はあってもいいんじゃないでしょうか」
美織、眉を寄せて考える。
春香、美織から目を逸らす。

○住宅街　コインランドリー　前（夜）

春香、自転車でやって来る。降りるかどうか迷い、やはり降りる。

○同　コインランドリー　中（夜）

数台の洗濯機が回っている。隅でスマホをいじっている人がいる。

春香、入って来る。

春香「猫ちゃん」

春香が呼ぶが、猫が出て来ない。

不安げに見回す春香。

しばらくして、出て来る猫。

春香、ほっとして撫でる。

春香「なんだ、もしかしてお腹いっぱいなの？」

春香、ふと顔を上げるとポスターが貼ってある。猫の写真と「迷い猫　里親募集中」の文字。

春香、驚いてポスターを見つめる。

ドアが開き、遠山が入って来る。

春香「あ」

遠山「こんばんは」

遠山、猫を撫でる。入れ替わりで、スマホをいじっていた人が出て行き、二人切りになる。

遠山「先にご飯あげちゃいました」

春香「はい。あの、これ」

春香、ポスターを指差す。

遠山「ここのオーナーさんが貼ったみたいですね。確かにいつまでもこのままって訳にはいかないし……」

遠山、ポスターを見つめる。その遠山を見つめる春香。

遠山「……電話してみます。飼いたいって」

春香「（ホッとして）はい」

遠山「だけど急がないとな」

春香、複雑な表情。

○東京都立癌センター　外観（夜）

○同　ホスピス病棟　廊下（夜）

春香、走っている。

○同　病室（夜）

春香が入ってくる。

春香「お父さん！」

酸素吸入器を付け、点滴をしている。

医師と看護師1が処置をしている。

園田、力なく手を挙げる。

春香「お父さん……」

医師「腹水が溜まっていたので抜く処置をしました」

春香「はい」

医師「痛みも強くなっていたので、モルヒネの量を増やしました」

春香、心配そうに園田を見つめる。園田、苦しそうに目を瞑っている。医師と看護師1が出て行く。

春香、ベッド脇の椅子に座る。

春香「お父さんごめん。これからはもっと頻繁に来るようにするから」

園田「病院」
春香「大丈夫。休めるし」
園田、目を瞑って呼吸をしている。
春香「お母さんは？」
園田「……旅行」
春香「え？　何で」
園田「花の９１年……」
春香「あぁ、大学時代の友達とか……。そんなの今年は止めにすればいいのに」
園田、苦しい息ながら苦笑い。
園田、春香の手を掴む。
春香「？」
園田「あれ……、どうした」
春香「あれ？」
園田「遊園地」
春香「！」
園田「考えたか？」
春香「そんなの……」
春香、立ち上がろうとするが園田の震える手が離さない。強く手を掴まれ、

戸惑う春香。

○私立南里大学病院　ナース室

春香、陽子、浅川が話している。

春香「申し訳ありません」

浅川「いいから、お父さんの事、大事にしてあげてね」

春香「はい」

陽子「大丈夫よ、そちらのお医者さんを信用しましょうね」

涙ぐむ春香。

○住宅街　コインランドリー　前（夜）

春香、自転車を押して、とぼとぼと歩いている。

コインランドリーの中に遠山がいるのが見える。立ち止まってしばし見つめ、そのまま立ち去ろうとする春香。

しかし、遠山は春香に気づいて外に出て来る。

遠山「こんばんは」
春香、黙って頷く。
遠山「大丈夫ですか？」
春香、思わずその場で泣き出してしまう。

○同　コインランドリー　店内（夜）
春香、椅子に座っている。
遠山、洗濯機から洗濯物を出している。
遠山「そうでしたか、お父様が」
春香「病院は休ませてもらって、看病に専念しようと思ってます」
春香、慌てて頭を下げる。
春香「すみません、重い話で」
遠山「いやいや、話して下さって嬉しいです。旅行とかは難しいかもしれないけど、何か好きな事が出来るといいんですけど」
春香「……父が知りたがってる事があるんです」
遠山「知りたがってること？」

春香「はい。何て言うか、説明しづらいんですけど……」

遠山、作業を中断して春香の斜め向かいに座る。

春香「父は知りたがってるけど、私は話さない方がいいと思うんです……」

春香、ため息をついて俯く。

遠山「何の事かは分からないけど、隠しているのは辛いですね」

春香、目を瞑って頷く。

春香「本当は話してしまいたい。だけど、父を傷つける事になるんじゃないかと思うんです」

遠山「きっとお父様は、どんな答えでも受け止める覚悟はしているんじゃないでしょうか」

春香「はい……」

春香、何かを言いかけて黙る。

遠山「いいですよ、話して下さい」

春香「でも」

遠山、じっと春香を見つめる。

春香「うちの両親は何て言うか、仮面夫婦みたいな所があって」

遠山「(頷く)」

春香「一見何の問題もないように見えるけど、本音で話し合ってないって言うか。その原因になった事かもしれなくて」

遠山「それを、園田先生だけがご存じなんですか？」

春香「私と、母ですね」

遠山「……」

春香「記憶がおぼろげではあるんですけど、子供の時に遊園地に行って」

春香、はっとして手で口を押える。

遠山「遊園地？」

春香「いえ、いいんです。すみませんこんな個人的な事」

遠山「いいじゃないですか。少なくとも今は」

春香「行ってみようかなと思ってるんです」

遠山「え？」

春香「遊園地に。本当に起こった事なのか、曖昧なので」
遠山「お一人で？」
春香「？」
遠山、柔和な笑顔で春香を見つめている。

○緑ヶ丘遊園地　入口　前（朝）
バスが止まり、春香と遠山が降りて来る。

○同　園内（朝）
家族連れで賑わう園内。
楽しそうに歩く遠山の後ろを春香が少し距離を開けて歩いている。
遠山「案外、近いんですね」
春香「はい、都内での転勤だったので」
遠山「遊園地なんて久しぶりですよ」
春香「すみません、チケット」
遠山「いえいえ、俺が無理やりついて来ちゃ

ったんで」
春香「なんか、すみません」
遠山「大丈夫ですよ」
春香「いえ、やっぱり」
遠山「じゃあこうしましょう。園田先生は過去の思い出を探る日。俺はそれに勝手についてきた。ね？」
春香「でも」
遠山「いいじゃないですか。だって俺ら、前から知り合いだったんですから」
気まずそうにしている春香。
遠山「すみません。何でも良かったんです。興居島に帰る前に」
春香「あ……、決まったんですか？」
遠山「まだですけど、そうなると思います」
遠山、構わず歩き出す。
春香、気まずそうについて行く。

○同　観覧車　外観（朝）
緑色の観覧車。

○同　観覧車　中（朝）
遠山と春香、向かい合って座っている。
遠山は外を見て楽しそうに話している。春香は複雑な表情で外を見ている。

○同　メリーゴーランド　前（朝）
春香、回るメリーゴーランドをじっと見つめる。

○（フラッシュ）同　メリーゴーランド　前
春香（5）がメリーゴーランドに乗っている。

○同　メリーゴーランド　前（朝）
春香、回るメリーゴーランドをじっと見つめる。

○（フラッシュ）同　メリーゴーランド
涼子と男性の姿。

○同　メリーゴーランド　前（朝）
春香、回るメリーゴーランドをじっと見つめる。

○（フラッシュ）同　メリーゴーランド
涼子と男性がそっと手をつなぐ。

○同　メリーゴーランド　前（朝）
春香、回るメリーゴーランドをじっと見つめる。

遠山の声「園田先生！」
春香、はっと我に返る。
遠山が赤い風船を持ってやって来る。

遠山「配ってました」

春香「あ、ありがとうございます」
遠山、春香の横に立ってメリーゴーランドを見つめる。

遠山「いいですね、こういうの。こう言う場所で、家族で。子供なんかもいて」
遠山と春香の間に、赤い風船が揺れて

いる。

遠山「どうですか、何か思い出せました？」

春香「はい……」

春香、ふと周りを見ると、浅川が家族で来ているのが見える。

春香「遠山さん、帰りましょう」

遠山「え？」

春香「会社の上司がいるんです」

遠山、頷いて先に歩き出す。春香も少し距離を開けて歩いて行く。

○道　タクシー　車内

後部座席に春香と遠山が座っている。

春香は赤い風船を持っている。

春香「すみません、せっかく来たのにあんまり遊べなくて」

遠山「遊ぶのが目的じゃなかったら」

春香、窓の外をじっと見ている。春香、目を見開く。春香の右手を、遠山が握っている。春香、手を抜こうとするが、

遠山は握って離さない。
春香、諦めたように力を抜く。遠山、ぎゅっと春香の手を握る。

○春香の自宅　リビング（朝）
部屋の隅に萎みかけた赤い風船がある。春香、身支度を整えている。
紙袋の中には「あしたのジョー」全巻が入っている。
スマホのバイブの音。春香、耳に当てる。

春香「はい」
陽子の声「あ、園田先生。お疲れ様です。お休みの所申し訳ありません」
春香「いえいえ、大丈夫ですよ」
陽子の声「先生はお休みされているからってお断りしたんですが……」
春香「どうしました？」
陽子の声「遠山美織さんからお電話がありまして」

春香「えっ」

陽子の声「緊急事態だからどうしても園田先生とお話したいって。先生が要経過観察リストに入れられていた患者様でしたし、一応お電話してみようと思いまして」

春香「ありがとうございます。どんな様子でした？」

陽子の声「慌ててらっしゃいました。電話も何度もかけ間違えてしまって、やっとつながったっておっしゃってまして」

春香「……すぐ行きます。今日の診察で大丈夫ですとお返事して下さい。はい、はい。よろしくお願いします」

春香、電話を切る。迷った末、漫画本だと分からないように荷物に布をかけて持つ。春香、玄関に向かう。春香、振り返り、萎みかけた風船を見つめる。

○私立南里大学病院　ナース室

春香、白衣を羽織りながらやって来る。

陽子に話しかける。

春香「遅くなりました」

陽子「お疲れ様です。すみません。もういらっしゃってます」

春香、待合室を見る。

○同　待合室

真っ青の美織。

ぎゅっと握った手が震えている。

○同　精神病棟　外来　診察室

春香が座っている。

ノックの音。ドアが開き、美織が入って来る。

美織「先生！」

春香、立ち上がって椅子を勧める。

春香「大丈夫ですか？」

美織「すみません」

美織、バッグを置こうとして落としてしまう。何とか座る。

春香も向かいの椅子に座る。

春香「どうされました？」

美織「あ、あの。あ！　先生お休みだったんですよね」

春香「いえ、大丈夫ですよ」

美織「ごめんなさい……」

美織、涙ぐんでいる。

春香、ティッシュを差し出しながら。

春香「ゆっくりで大丈夫ですよ」

美織「（食い気味で）妊娠したんです」

春香「！」

美織「これ……」

美織、バッグの中から妊娠検査薬を出して見せる。

春香「え……」

春香、動揺して目を泳がせる。

美織「実は……、例の彼と続いてたんです」

春香「！　そうだったんですか」

美織「やっぱり寂しくて、私」

春香「はい」

美織「時々、その……」
春香、じっと話を聞いている。
美織「まさかこんな事になるって私、思わなくて」
美織、泣いている。
美織「どうしたらいいでしょうか」
春香「とにかくまずは、ちゃんと診察してみましょう。お近くに産婦人科はありますか？　良ければ、こちらの病院を紹介する事も出来ますし」
美織「はい……」
春香「ちゃんと検査して、それから」
美織「夫の子供として育てたいと思ってるんです」
春香「！」
美織「きっと喜んでくれると思うんです。彼は子供を欲しがってましたから」
春香「だけどあの……、ずっと別居されてるんですよね？　ご主人の子供じゃない事はすぐに分かってしまうのでは？」

美織「今夜、会います」
春香、目を見開く。
美織「そうすれば、彼の子供って事に出来ると思うんです」
春香「それは……。最初は上手くいったとしても、いつかはばれるかもしれませんよ。血液型とか、見た目とかで」
美織「いえ、きっと上手くいきます」
美織、じっと春香を見つめる。
美織「子はかすがいって言いますもんね。彼は情に厚い人だから、子供の顔を見たらきっと」
春香「だけど、遠山さんはそれでいいんですか？　一生、隠し通すなんて……」
美織「先生、どうしても私、主人と別れたくないんです。やり直したいんです」
春香「……」
美織「今はすれ違ってるけどきっと、子供さえいれば」
春香「遠山さん。あまり性急に答えを出さな

いで、じっくり考えましょう」

美織「……」

春香「もちろん私もご相談に乗りますし、ご主人も交えてご相談させていただくことも出来ますし」

思いつめている美織の顔。

春香、心配そうに美織を見つめる。

○同　更衣室（夕）

春香、椅子に座っている。

ロッカーの中には「あしたのジョー」全巻が入っている紙袋。

春香、じっと前を見つめている。

春香、スマホを取り出して操作する。

「遠山さん」と書かれたアドレスで手を止める。

その画面をじっと見つめる。

電話がかかって来る。

春香、出る。

春香「はい」

春香、目を見開く。

○東京都立癌センター　前（夜）

タクシーが止まる。春香が出て来る。

○同　ホスピス病棟　廊下（夜）

春香、慌てた様子でやって来る。

個室のドアを開ける。

○同　病室（夜）

酸素吸入器と心電図計を付けた園田が寝ている。

園田の手を握っていた涼子（５３）が顔を上げる。

涼子「春香」

春香「お父さん！」

涼子「今は寝てる。とにかく辛くないようにして下さいってお願いしたの。傾眠状態って言って、このまま、目が覚めない可能性もあるんだって」

春香、園田の顔をじっと見つめる。春香、持ってきた漫画を横の棚に置く。

涼子「それ、何？」

春香「お母さん、ちょっといい？」

涼子「え？」

春香「外で」

涼子「でも」

春香「ちょっとだけだから」

春香、病室の外に出る。

○同　喫煙所（夜）

小さな喫煙所の中で、涼子がタバコに火を点ける。

春香、喫煙所の入口でその様子を見ている。

涼子「煙い？　ごめんね。昔の癖でまた吸いたくなっちゃって」

春香「お父さんは止めてるのに」

涼子「病気になってからね」

春香「匂いで分かるでしょ」

涼子、煙を吐き出す。

涼子「この間、大学時代の子と会ってさ」

春香「お父さんに聞いた」

涼子「旦那さん公務員だから、いざとなったら安い葬儀場紹介してくれるって」

春香、涼子を睨む。

春香「（小声）信じらんない」

涼子「ん？」

春香「お母さんに聞きたいことがあるの」

春香、射るように涼子を見る。

春香「私が5歳ぐらいの時、お母さん、お父さん以外の男の人と付き合ってたよね」

涼子、愕然として春香を見つめる。

涼子「どうしたの、急に」

春香「私、ずっと覚えてた」

涼子「（笑って）何のこと？」

春香「お父さんが仕事の日。お母さん私を連れてその人と会ってたよね」

涼子、目を泳がせる。

春香「動物園とか遊園地とか。普段お父さん

は連れて行ってくれないような所にいっぱい連れて行ってくれた。私はすごく楽しかったけど」

涼子「楽しかったなら良かったじゃない」

春香「あの人、誰？」

涼子「忘れちゃった」

春香「嘘」

涼子「本当よ」

春香「お母さんより１０歳ぐらい年上の人だよ。手が大きくて優しい感じの人だった」

涼子「会社の上司の人、だったかな」

春香「会社の人と、休みの日に二人で会うの？」

涼子「二人じゃないわよ。春香も一緒だったじゃない」

春香「おじさんといる時のお母さんは普段と全然違ってた」

涼子「え、やだ、何？」

春香「いつもより綺麗で、優しくて、楽しくて、かわいくて」

涼子、気まずそうに目を逸らす。

春香「でもね、お父さん、私に聞いたことあるんだよ。昨日、本当にお母さんと二人で出かけたのか？　って」

涼子「……」

春香「私、言っちゃいけないんだと思った。お母さんがいつもより高い声で笑うことと、いつもは好きじゃないアイスクリーム食べてはしゃいでることとか」

涼子「春香」

春香「だから黙ってた。だってお父さんかわいそうだもん。お父さんといる時より、お母さん楽しそうだったよなんて、私」

涼子「春香！」

ドアが開く音。

看護師1の声「園田様のご家族の方いらっしゃいますか？　お薬の事でちょっとご相談があるんですが」

涼子「あ！　はーい」

涼子、行きかける。

春香「ごめんなさい！　後で伺いますのでち

ょっと待ってもらっていいですか？」
看護師１の声「承知いたしました」
ドアが閉まる音。
涼子、所在なさげに立っている。
春香「最近、お父さんに会うとその事聞かれるの」
涼子「……」
春香「お父さん、もう力無くて、声もあんまり出てないのに、やっぱり知りたいんだって。その事ばっかり言うの」
涼子「……」
春香「お父さん最期だから、本当に最期だから、私、あの時の事話そうかと思った。でも言えない。どうしても！」
涼子「言えば良かったじゃない。お母さんと会社の人と三人で行ったよって。私は構わないけど？」
春香「言えるものなら言いたかった。だけど、お父さんは真実を知って、それでどうなるの？」

涼子「だけど、知りたがってたんでしょ？」
春香「お母さんは私を巻き添えにしたんだ」
涼子「……」
春香「私を言い訳にして、利用したんでしょ？
そのせいで私がどんな罪を背負うのか、考えもしないで」
涼子「春香が遊びに行きたがってたから……」
春香「また、私のせい？」
涼子「違うわよ。ほら、お父さんあの時期すごく忙しかったじゃない？　だから、会社の人が気を利かせてあちこち連れて行ってくれたんじゃない？」
春香「そうやってまた逃げるんだ」
涼子「逃げてなんかいないわよ！　大体私は会社の人と遊園地に行ったことなんて全然覚えてないし、何もやましいことはないから、お父さんに話されたって構わないって言ってるのよ！」
春香「だったら話してよ！　お父さんに！」
涼子「(ため息)」

春香「あったことを無かったことにしないで欲しいの！」

涼子「……だから何もなかったって」

春香、涼子の腕を掴む。

涼子の手からタバコが落ちる。

涼子「ちょ、危ない！」

春香「お父さんにちゃんと話して！」

春香、嫌がる涼子の腕を引っ張って、病室に戻る。

○同　病室（夜）

春香、涼子を引っ張ってやって来る。

園田が寝ている。

看護師1が様子を見ていたが、春香の顔を見て目を伏せて出て行く。

看護師1「何かあったらナースコールでお呼び下さい」

春香、涼子を園田の前に立たせる。

涼子「意識があるかどうかみたいだけど」

春香「末期の患者さんでも、聴覚だけは残っ

てるんだよ」

涼子、園田の手を握る。

涼子「お父さん、ずっと連れ添ってくれてありがとう」

春香「……それだけ？」

涼子、じっと園田の顔を見つめる。

春香、拳を握り締める。

春香「私、ずっと不思議だった。どうしてお父さん、お母さんと離婚しないんだろうって」

涼子「……」

春香「どうしてなの？　お父さん」

春香が園田に触れようとすると、涼子がその手を振り払う。

涼子「あんたには分かんないわよ」

春香「え？」

涼子「お父さんは私と離婚したがってなんかないわよ」

春香「？」

涼子「そのずっと知りたがってたこと？　そ

れがいい証拠じゃない。そう言う、長い時間かけて育った執着みたいな、汚れみたいなものを、愛情って呼ぶんじゃないの？」

涼子、園田の頬を撫でる。

春香、不気味な物を見るように二人を見つめる。

春香「違う。お父さんは本当に……」

涼子「自分だけ聖人君主みたいな顔しちゃってさ。あんただって人に言えない事の一つや二つ、したことあるでしょ？」

春香、自分の手をじっと見つめる。

○（フラッシュ）道　タクシー　車内

後部座席に座った春香と遠山が手をつないでいる。

○元の東京都立癌センター　病室（夜）

園田の手を握っている涼子。

春香、手を見つめている。

心拍計が警告音を鳴らす。

春香「お父さん！」

春香、ナースコールを押す。

医師や看護師が入って来て、園田の様子を見る。

春香、不安そうにその様子を見守る。

心電図が「0」と表示され、ピーと鳴る。春香、園田の体に飛びつく。

春香「お父さん……、ごめんね。ごめんなさい……」

心電計の音が鳴り響く。

× × ×

看護師たちが園田の体を清めている。

春香と涼子、それを見守っている。

春香、俯いて自分の手をじっと見つめている。

春香、バッグを持つ。

涼子「どこ行くの」

春香「すぐ戻る」

涼子「ちょっと」

春香の腕を取ろうとした涼子の手を、

春香が振り払う。
春香、走って病室を出て行く。

○同　前の道（夜）
春香、手を挙げてタクシーを止める。

○住宅街　道（夜）
春香が走っている。
コインランドリーに人影がある。

○コインランドリー　前（夜）
遠山の影が見える。

○同　中（夜）
遠山、猫を撫でている。
春香が慌てて入って来る。
遠山、嬉しそうに春香を見つめる。

春香「遠山さん」
遠山「ちょうど今帰ろうかと思ってた所です。
会えて良かった」

春香、胸に手を当てて乱れた息を整える。

春香「あの」

洗濯機の乾燥が終わる音。遠山、立ち上がって洗濯物を取り出す。

遠山「ポスター剥がしてもらいました」

春香が壁を見ると、ポスターが無くなっている。

遠山「やっと片が付きそうなので」

遠山、笑顔で頷く。

春香、不安な顔。

春香「それって……」

遠山、机で洗濯物を畳み始める。

遠山「妻から連絡がありました。今夜、話があるって」

春香、胸に手を当てる。

遠山「ようやく終わりに出来ます」

春香「終わり……？」

遠山「病気の時に放り出すなんて冷たい男だと思われるかもしれないけど、やっぱり裏

切っていた妻を支える気にはなれなかった」
遠山、洗濯物を畳み続ける。
遠山「これでやっと」
春香「待って下さい。行かないで下さい。私決めました。話します。医師を辞めることになったとしても……」
遠山、驚いて春香を見つめる。
春香「本当の事、話します。遠山さんの奥様の事。奥様は……」
話そうとする春香を、遠山が手で制する。
遠山「待って。ここまで来たら、妻から直接聞きたいんです」
遠山、畳んだ洗濯物をバッグに仕舞う。
遠山「せっかく自分から話すと言ってるし」
春香「違うんです」
遠山「大丈夫。今夜本当の事を聞いたら、離婚して興居島に帰ります。こいつもちゃんと飼います。興居島は遠いですけど、絶対に遊びに来て下さいね」

春香がなおも話そうとするが、遠山のスマホが鳴る。

遠山、スマホを見る。

遠山「行かないと。明日またここで。いいですか？」

遠山、コインランドリーを出て行こうとする。

春香「奥様から何を言われても、気持ちが変わらないって言えますか？」

遠山「え？」

春香「もし、真実を聞いたとして、それで本当に終われるんですか？」

遠山「……」

春香「遠山さんが奥さんの本当の事を知りたいって、そう思う気持ちって、それって愛情なんじゃないですか？」

春香、真剣に遠山を見つめる。

遠山「愛情じゃないです」

春香と遠山、見つめ合う。

春香、大きく息を吐く。

春香「分かりました……」
遠山「園田先生？　大丈夫ですか？」
春香「明日また、ここで待ってます」
遠山「はい。行ってきます」
遠山、出て行く。
春香、ベンチに座り、じっと地面を見つめる。
春香、回っている洗濯機を見つめる。
中の洗濯物がぐるぐると回っている。
春香、走り出す。

○コインランドリー　前（夜）
春香、外に出る。
遠山が歩いているのが見える。
春香、走って追いかける。
遠山に後ろから抱き着く。
遠山「！」
春香「行かないで下さい！」
遠山「園田先生！？」
春香「遠山さんは、会社の上司の方と関係し

ていました」

遠山「！」

春香「今もその上司の方と関係があります。
遠山さんはその人の子供を妊娠しています」

遠山「え、ちょっと待って、それは」

春香「聞いて下さい！ 遠山さんは離婚した
くないから、その子供をあなたの子供とし
て産んで、育てるつもりなんです。今夜、
関係を持つと言っていました」

遠山「そんな……」

春香「本当です。妊娠検査薬がバッグに」

遠山、手で春香の口を塞ぐ。

春香、じっと遠山を見つめる。春香の
目に涙が浮かぶ。

遠山、春香の口から手をどけて、涙を
拭う。

遠山、春香をそっと抱き締める。

遠山「ありがとう」

遠山、走って行く。

春香、その場でしゃがみ込んで泣いて

しまう。
コインランドリーから出て来た猫が、
心配そうに春香に体をこすりつける。

○葬儀場　祭壇前
花に囲まれた祭壇。白い棺。園田の遺影が飾られている。
喪服を着た春香が棺を撫でている。
春香、黙って泣いている。
がやがやと賑やかな一団がやって来る。涼子と鈴木千尋（53）、その他数人の友人。
千尋「あらぁ、春香ちゃん！　綺麗になって！」
春香、黙って頭を下げる。
千尋「おばさんの事覚えてる！？　今、お医者さんやってるんだって？　昔から頭良かったもんね！」
春香「……はい」
千尋「（小声で）でも大変よね、心のお医者さんって言うのも。お仕事の悩みとか、人に

話せないんでしょ？　ストレスもたまるわよね」

春香「……」

千尋「それにしても修平さん残念だったね。まだ６２だったのに……」

涙ぐむ友人たち。

涼子「見つかった時には、もうステージ４だったから」

千尋「嫌んなっちゃうねぇ、ほんと」

涼子「でも、病気で良かったのかもって思う時もあるの」

千尋「えぇ？」

涼子「二人でゆっくり旅行も出来たし、私も春香も心の準備、出来たから。ね？」

涼子が春香を見る。春香、頷かない。

春香、千尋に頭を下げる。

春香「千尋さん、お葬式の事いろいろ手配していただいてありがとうございます」

千尋「いいのよ、うちのがほら、そう言うのやってるから」

春香「私はこれで失礼します」
千尋「えっ」
友人たち、顔を見合わせる。
春香「申し訳ありません。仕事で」
千尋「えっ、でもまだ。休めないの？」
春香「すみません」
千尋「もうちょっといられない？　住職様も来られるし」
春香「すみません」
千尋「だってお父さん寂しがるわよ。ねぇ？」
友人たち、頷き合う。
春香「母の事、よろしくお願いします」
涼子、黙って棺の横の花を直している。
春香「お母さん。じゃあね」
涼子、花びらをむしる。
涼子「ふうん」
春香、困っている千尋たちにもう一度頭を下げて会場を後にする。
春香を振り返らない涼子。
春香も涼子を振り返らない。

○同　外

どんよりとした曇り空。雨がぽつぽつと降っている。

春香、黙って葬儀場を見上げる。

春香、立ち去る。

○私立南里大学病院　更衣室（夕）

春香、バッグをロッカーに仕舞っている。バッグから辞表を取り出し、白衣のポケットに入れる。

○同　ナース室（夕）

春香、白衣を羽織りながらやって来る。

陽子たちが忙しそうに立ち働いている。

陽子「園田先生！？」

春香「お疲れ様です」

陽子「お休みじゃなかったんですか？」

春香「もう終わったので」

陽子「この度はご愁傷様でした」

春香「長い間お休みいただきましてありがとうございます。浅川先生はどちらですか？」
陽子たち、看護師が顔を見合わせる。
春香「どうかしました？　何か」
浅川の声「園田先生！」
春香が振り返ると浅川がいる。
浅川「どうしたの。もういいんですか？」
春香「はい、長くお休みいただきましてありがとうございました。お陰様で父を見送ることが出来ました」
浅川「そうですか。大変だったね」
春香「実は浅川先生にご相談がありまして……。遠山美織さんの事なんですが」
浅川の顔が曇る。
浅川「聞いた？」
春香「え？」
陽子たちが浅川に向かって頭を振る。
春香「どうかしたんですか？」
浅川「ちょっといいかな」
浅川、奥の打ち合わせスペースを指差

す。

○空（夕）

雷が鳴り、雨が降り出す。

浅川の声「昨日の夜、遠山さんが緊急搬送されたんだ」

○私立南里大学病院　廊下（夕）

春香が走っている。

浅川の声「手首を切ったんだ。幸い、命に別状は無かったんだけど」

春香、入院病棟へと急ぐ。

○同　大部屋（夕）

８台程のベッドが並ぶ部屋。窓の外は土砂降り。

春香、入り口に立つ。

奥のベッドに青白い顔をした美織が寝ている。

浅川の声「お子さんはだめだった」

雷が鳴る。

光が美織の顔を照らす。春香、苦しそうに胸を押さえる。

○同　待合室（夕）

ベンチに遠山が座っている。

暗い顔で、手を組んでいる。

春香と浅川が遠くから見守っている。

浅川「旦那さんと口論になって、その後で急激に症状が悪くなったらしい。妊娠が分かってから、薬も控えていたんだってね」

春香「……私のせいです」

浅川「いや。園田先生の対応は間違っていなかったと思うよ」

春香「いえ……」

春香、きつく目を瞑る。

話し声に気づいた遠山が顔を上げる。

青白い顔の遠山。

遠山「園田先生……」

春香「遠山さん」

遠山「すみません、まさかこんな事になるな

んて」

浅川「こちらこそ、もう少し慎重に様子を見るべきでした。申し訳ありませんでした」

遠山、春香を見る。春香、遠山を見られない。

浅川「今後の治療方針を決めたいので、少しお話聞かせていただいてもいいですか？」

遠山「はい」

春香、遠山を見ずに言う。

春香「あの、私は奥様の方についていてあげたいんですが」

浅川「あぁ、そうだね。お願い出来るかな」

春香「はい」

春香、その場を立ち去る。

○同　廊下（夕）

春香、病室の方へ向かおうとして足を止める。春香、そっと引き返し、待合室の側に立つ。

待合室には遠山と浅川が座って話を

している。

○同　待合室（夕）

遠山と浅川が並んで話をしている。

遠山「妻と口論になって」

浅川「はい」

遠山「妻のバッグが倒れて、中から妊娠検査薬が出てきました」

浅川「……」

遠山「私はずっと別居していたので……」

浅川「奥様は？」

遠山「不倫相手との関係を認めました」

柱の陰に、春香の影がある。

浅川「そうですか」

遠山「その後……」

浅川「はい」

遠山「私は持っていた離婚届を渡しました」

浅川「……」

○同　廊下（夕）

春香、遠山の話を聞いている。

遠山の声「妻は泣いて、子供を産みたいと言いましたけど、そんな事は知らないよって」
春香、苦しそうに目を瞑る。
遠山の声「私は、きっぱり離婚するつもりだったので」
春香、たまらずその場を離れる。

○同　大部屋（夕）
春香、恐る恐る部屋に近づく。
奥のベッドにカーテンがかかっている。美織が起き上がっているシルエットが見える。美織が、手首をいじっているのが見える。
春香、はっとしてベッドに近づく。
春香「遠山さん、起きられてますか？」
美織「……」
春香「園田です。入っても大丈夫でしょうか？」
春香、カーテンを開ける。
美織、生気の無い顔。左手首の包帯をいじっている。

春香「だめですよ、触ったら……」
春香、美織の手をそっと握る。
美織、ぼんやりとした顔で宙を見つめている。
春香、ナースコールを押そうとする。
美織、春香の手を掴んで止める。
美織「放っておいてください」
春香「遠山さん……」
美織「消えようと思ったんです。もう、主人を解放してあげたくて」
美織、お腹を押さえる。
美織「なのに……」
美織、ぼろぼろと涙をこぼす。
春香も泣きながら美織の背中を撫でる。

○同　待合室（夕）
遠山と浅川が並んで話をしている。
遠山「こうなってみて初めて、私の態度が妻をこんなに追い詰めていたんだと気づきま

した」

遠山、頭を抱える。

遠山「普通の夫ならどうするんでしょうか？こんな時でも、妻を支えようと思うものなんでしょうか？」

窓の外、雨が降っている。

○同　医務室（夜）

書類等が積まれた机が並んでいる。

隅のソファに、春香が座っている。

浅川が、コーヒーを注いでいる。

浅川「悪かったね。大変な時に」

春香、暗い顔で俯いている。

浅川「しばらくは僕も一緒に経過観察して行こうと思っているから。遠山さんは経過によっては長期の入院が必要かもしれないね」

浅川が春香の向かいに座る。

春香、ポケットから辞表を取り出してテーブルに置く。

浅川、目を見開く。

春香「申し訳ありませんでした」
浅川「ちょっと待って。今回の事は園田先生の責任じゃないからね」
春香「いえ……」
浅川「それともお家の事で何か？」
春香、小さく深呼吸をする。
春香「遠山さんの旦那様に、無断で病状をお話しました」
浅川「！　遠山さんからは、話さないで欲しいと言われていたの？」
春香「（頷く）」
浅川「どうして話したの？」
春香「……」
浅川、辞表を見つめる。
浅川「さっき、遠山さんの旦那さんとお話していて気が付いたんだけど、園田先生は前からあの方と知り合いだったんじゃない？」
春香「え」
浅川「以前、家族で遊園地に行ったんだけど、その時に園田先生を見かけたんだ。休日だ

ったし、声をかけるのも悪いかと思って黙っていたんだけど。あの時、一緒にいた方だよね？」

春香「……はい」

浅川「患者さんのご家族だと知っていて会ってたの？」

春香「……最初は知らなかったんです。ご近所さんで、ちょっとしたきっかけで話すようになって」

浅川、腕を組んで考え込む。

浅川「患者さんのご家族と会うのは職務的には禁止はされていないよ。だけど、その方に患者さんの症状を話したとなると……」

春香「はい……、守秘義務違反で医師免許をはく奪されても仕方がないと思っています」

浅川「想像になるけど、旦那さんから遠山さんの事を聞かれて、それで話してしまったのかな」

春香、辞表を差し出す。

春香「どちらにせよ、私のした事で、遠山さ

んがあんなことになった事に変わりません。
本当に申し訳ありませんでした」
浅川、辞表を受け取る。
浅川「僕に謝る事ではないよ。だけど、正直に言って、とても残念です。この事は院長にも報告する事になるけど」
春香「……はい」
浅川「園田先生はこれでいいの？」
春香「……」
浅川「園田先生は患者様に心から寄り添える医師だと思ってました。だから知り合いの病院にも紹介しようと思っていた」
春香「はい」
浅川「これで辞めてしまっていいのかな……。それは逃げなんじゃないかな。医師としての最後の仕事が、これで終わりでいいの？」
春香、ぎゅっと拳を握り締める。

○住宅街　道（夜）
春香、自転車を押してとぼとぼと歩い

ている。

○春香の自宅　リビング（夜）

春香、ぼんやりと座っている。

食べかけのコンビニ弁当が冷えて固まっている。

時計は１１時を指している。

春香、肩を抱く。

○住宅街　コインランドリー　中（夜）

誰もいない店内。

春香が入って来る。

猫が駆け寄って来る。春香、バッグからご飯を出してあげる。

猫が食べ始める。

○私立南里大学病院　駐車場（夜）

広い駐車場に一台の車が止まっている。中に、遠山がいる。遠山、美織が入院している病室の窓をじっと見つ

めている。

○住宅街　コインランドリー　中（夜）

春香、猫を抱き締めて座っている。

壁の時計は深夜1時を指している。

人気が無い店内に、時計の秒針の音が響く。

○私立南里大学病院　大部屋（夜）

8人部屋。それぞれのブースはカーテンが閉められている。

○同　美織のベッド（夜）

美織、青白い顔で寝ている。

○住宅街　コインランドリー　中（夜）

春香の膝の上で猫が寝ている。

猫をそっとどかして、春香は店を出る。

○遠山の自宅　外（夜）

春香がやって来る。アパートをじっと見つめる。

○同　階段（夜）

春香が階段を上っている。

○同　遠山の部屋の前（夜）

春香、チャイムをじっと見つめる。

押そうとするが、手が止まる。

春香、押さずにその場を立ち去る。

○駅　ホーム（朝）

春香、百合の花束を持って電車を待っている。

電車がやって来る。春香、乗り込む。

○同　車内（朝）

そこそこ混んでいる車内。

春香、空いている場所を探して周りを見回す。

車内に、二ノ宮がいる。

春香、とっさに目を伏せて二ノ宮から離れようとする。
しかし、二ノ宮がスマホをいじっているのに気が付き、足を止める。
春香、二ノ宮が見える位置に立つ。
電車が出発する。
春香、そっと二ノ宮を見つめる。
二ノ宮がスマホをいじっている。春香、心配そうに二ノ宮を見つめる。
二ノ宮の横に女子高生達がいる。
二ノ宮がそれを見つめている。
春香、二ノ宮から離れて隣の車両に移ろうとする。しかし足を止める。
二ノ宮、スマホのカメラアプリを起動する。それを女子高生に向けるか迷っている。
春香、駆け足で二ノ宮に近づく。
春香「二ノ宮さん！」
二ノ宮「！」
慌てた二ノ宮が、スマホを落とす。

春香「ご無沙汰しています。すみません、突然」

青くなった二ノ宮、スマホを拾って春香から離れる。電車が止まる。

二ノ宮、電車を降りる。

春香、慌てて後を追う。

人にぶつかってしまい、舌打ちをされる。

春香「すみません」

○駅　ホーム（朝）

春香、二ノ宮の後を追って電車を降りる。

春香「二ノ宮さん！」

逃げようとしていた二ノ宮、足を止める。

春香「すみません、最近診察に来られていなかったので、心配で」

二ノ宮「……」

春香「突然すみませんでした」

二ノ宮「外で声をかけられたくないって事ぐらい分かりませんか？」
春香「ごめんなさい」
二ノ宮「僕がまた、って思ったんですか？」
春香「いえ、あの……」
二ノ宮「ふ、不愉快です」
二ノ宮、立ち去ろうとする。
春香、ぎゅっと百合の花束を握り締める。しかし二ノ宮は立ち止まって、振り返る。
二ノ宮「……先生どうして、病院を休んでたんですか？」
春香「あ……、すみません。家族の事情でお休みをいただいておりまして」
二ノ宮「先生以外の人には話したくないんです……」
春香「！」
二ノ宮「先生、いつも僕の話ちゃんと聞いてくれますよね。ダメな事してるのは僕の方なのに……。だから、先生が復帰するなら

また診察に行きます」

春香「あ……」

二ノ宮「失礼します」

二ノ宮、頭を下げて立ち去る。

春香「はい、また来てくださいね」

春香、二ノ宮を見送り、ぎゅっと目を瞑る。

○墓場（朝）

「園田家の墓」と書かれた墓石の前。

春香、百合の花束を墓に供える。

手を合わせ、じっと墓を見つめる。

○私立南里大学病院　ナース室

浅川が陽子と談笑している。

春香がやって来る。

陽子「お疲れ様です」

春香、浅川に頭を下げる。

浅川、アイコンタクトをして歩き出す。

○同　廊下

春香と浅川が立ち話をしている。

春香「もう一度だけ、遠山さんの診察をさせていただきたいんです」

浅川「今は落ち着いているよ」

春香「お願いします」

浅川「守秘義務を破った医師を、患者様に近づける訳にはいかない。伝えたいことがあるなら僕から伝えるけど」

浅川の冷たい表情に、春香、ぐっとこらえる。

春香「私は遠山さんの担当医であるにも関わらず、きちんとお話を聞けていませんでした。それは、遠山さんの旦那さんとのことで、気持ちが浮ついていたからです」

浅川「……」

春香「だけど最後にもう一度だけ、遠山さんのお話を聞きたいんです。何も役に立たないかもしれません。だけど、少しでも私がお力になれるなら、最後に医師として、お

話を聞きたいんです。お願いします」
頭を下げる春香を、浅川がじっと見つめる。
浅川「患者様の味方になる事。僕が立ち会う事。それから、園田先生が旦那さんに話したことは明かさない事。この三つ、約束出来る？」
春香「はい……！」
浅川「分かった。行こう」
春香、ぐっと唇を噛み締める。

○同　大部屋
入院患者が、思い思いの方法でくつろいでいる。
美織、ぼんやりとベッドに横になっている。手つかずの昼食。
遠山、タオルなどを棚に仕舞っている。
遠山「明日も来る」
美織、黙って首を横に振る。
遠山「洗濯物とか、あるから」

美織「……もういいんだよ」
遠山「……」
春香と浅川が入って来る。
浅川「失礼します」
春香、遠山と目が合う。春香、遠山から目を逸らす。
浅川「お加減いかがですか？」
美織、ぼんやりと頷く。
春香「少し、お話しても大丈夫ですか？」
美織「……はい」
春香「旦那様はもうお帰りですか？」
遠山「あ、はい」
春香「すみませんけど、お時間があれば外の待合室でお待ちいただけませんか？」
遠山「え？」
春香「後で少し、お話させていただきたいので」
遠山「あ、はい。分かりました」
遠山、出て行く。
春香、美織のベッド脇の椅子に座る。

浅川、カーテンを閉めてその外に立つ。
春香「夜はゆっくり眠れていますか？」
美織「……はい」
春香「食欲はありませんか」
美織、ぼんやりと宙を見つめる。
春香「……実は、担当が浅川に変わる事になりそうなんです」
美織「え……」
春香「申し訳ありません」
美織「そうですか……」
春香「それから、私が曖昧な態度を取ってしまったが為に、遠山さんを迷わせてしまった事、謝らせて下さい。申し訳ありませんでした」
春香、小さく息を吸う。
春香「遠山さん。本当のお気持ちを、旦那様に話してみませんか？」
美織「私の気持ち……？」
春香「病院に来られた時に、最初にお話ししてくれた事です。どうして、会社の上司の

方と関係してしまったのか……」

美織「……」

春香「遠山さんは旦那様に愛されたくて、気にして欲しくて、努力したにも関わらず気が付いてもらえなかった」

美織、布団をぎゅっと掴む。

春香「どうしようもなく寂しかった時に、優しくしてくれた人に気持ちが揺らぐのは当然の事だと思います」

美織「……私が最低なんです」

春香「……そう言う想いも含めて、旦那様に全て話してみてはどうでしょうか？」

美織「全て？」

春香「はい」

美織「今更……」

春香「まずは、話す事から始まるんじゃないでしょうか」

美織「……」

春香「今すぐ全部は無理かもしれない。だけど、少しずつ、やってみませんか？」

美織「拒否されたら……？」
春香「されるかもしれない、だけど、何もせず終わりになるよりいいと思います」
美織「……」
春香「私の両親も、母が浮気していたんです」
美織「！」
春香「父はその事が気になりつつも、離婚もせず、言及する事も無く、仮面夫婦のようになりました」
美織「……」
春香「私はそんな両親が不思議でたまらなかった。どうして別れないんだろうって。だけど今は少し分かる気がします」
美織「はい……」
春香「波風を立てるのは怖いんですよね。誰だって傷つきたくない。何も無かったことにしたい時があります」
美織「……」
春香「だけど遠山さんは、きっとそうはなりたくないんですよね……？」

美織、しばらく黙ってから、小さく頷く。

春香「私にお気持ちを話してくれてありがとうございました。あの、私……」

春香、苦しそうに俯く。

春香「私は……」

カーテンが開き、浅川が声をかける。

浅川「園田先生」

春香、はっとして顔を上げる。

美織、震える手を差し出す。

美織「先生、私話してみます」

春香「遠山さん……」

美織「ありがとうございました」

春香、美織の手を握り締める。

○同　待合室

遠山が座っている。

春香がやって来る。

春香「お待たせいたしました」

春香、遠山の斜め向かいに座る。

浅川は遠くから見守っている。
遠山はじっと春香を見つめるが、春香は目を合わせられない。
春香「奥様とお話させていただきました。しばらくは入院して様子を見ていく事になると思います」
遠山「どれぐらいですか？」
春香「分かりません。症状を見ながらですが、また同じ事が起こらないとも限りませんので……」
遠山「園田先生が担当していただけるんですか？」
春香「すみません。実は病院を辞めることになりまして。浅川に引き継ぐことになりました」
遠山「！」
遠山、浅川と春香を交互に見つめる。
遠山「（小声）俺のせいですか」
春香「それは違います」
遠山「妻の事、話すように迫ったからですよ

ね」

春香、組んだ手をじっと見つめる。

春香「遠山さん、奥様のお話を聞いてあげて下さい」

遠山「え？」

春香「これまでの事、全て自分の口からお話したいそうです」

遠山「それも治療の一環ですか」

春香「治療……。でもありますが、ご夫婦の間で必要な話し合いだと思います」

遠山「俺は離婚したい気持ちは変わりません」

春香「はい」

遠山「今更、話をした所で……」

春香「……申し訳ありません。それはご夫婦での問題なので、私が何かお話出来る事ではありません」

遠山、自嘲気味に笑う。

遠山「急に、冷たいんですね」

春香「私は遠山美織さんの主治医なので」

遠山、じっと春香を見つめる。

春香、苦しそうに目を瞑る。

春香「……すみません。本当は私、遠山さんの事が好きでした」

遠山「それは、俺も」

春香「だけどもう、無理だと思うんです。私は医師として失格です。美織さんがあんな事になってしまって、お子さんまで……」

遠山「俺は妻が何を言おうと離婚するつもりですよ」

春香「……はい」

遠山「もう一緒にいてくれないんですか？」

春香、じっと考える。

決意したように顔を上げる。

春香「はい」

遠山、春香から目を逸らす。

遠山「それは園田先生が、妻の主治医だからですか？」

春香「……そうです」

遠山「そうですよね。最初から、そうでしたもんね」

寂しそうな遠山の横顔。
遠山、じっと春香を見つめる。
春香、ぐっとこらえて立ち上がる。
春香「失礼します」
遠山「さようなら……」
遠山、じっと春香を見つめる。
春香、遠山から目を逸らしてその場を立ち去る。
遠山、立ち上がって病室の方へ歩いて行く。

○同　大部屋
美織が寝ている。遠山が入って来る。
美織の目から涙が流れている。
遠山、それを見つめている。
そっと手を伸ばし、美織の涙を拭く。
遠山、濡れた手をじっと見つめる。

○同　従業員用玄関　外（夜）
紙袋に入れた荷物を持って春香が立

っている。
浅川が立っている。
春香「浅川先生、いろいろとお世話になりました」
浅川「こちらこそ」
春香「処分の方は、またご連絡ください」
浅川、ポケットから名刺を取り出して春香に渡す。
春香「？」
名刺には「こころメンタルクリニック」と書かれている。
浅川「僕の友人の病院」
春香「！　え、だって。院長には」
浅川「一身上の都合で退職、と言う事にしました」
春香「私はもう……」
浅川「やってしまった事はもうしょうがない。同じ事を繰り返さなければいい。僕はまだ、園田先生は医師を続けるべきだと思ってます」

浅川、春香の手に名刺を握らせる。

○住宅街　コインランドリー　前（夜）

春香がやって来る。

○同　コインランドリー　店内（夜）

春香が入ると、猫がすり寄って来る。

春香、猫を抱き上げる。

春香「お待たせ。一緒に帰ろうね」

春香、猫を抱いて外に出る。

○春香の自宅　リビング（夜）

猫がご飯を食べている。新品の猫トイレや猫グッズがある。

春香、撫でている。

春香「すぐにペットＯＫの所に引っ越すからね。ちょっとだけ静かにしてね」

春香、ふらふらとベッドに倒れ込む。

春香「疲れた……」

春香、布団に包まる。

ゴミ箱には、萎んだ赤い風船と、愛媛のガイドブックが捨ててある。

○街中（夕）

人混み。クリスマスのイルミネーションが輝いている。

○春香の自宅　リビング（夕）

広いファミリータイプのマンション。本棚には精神医学の本が並んでいる。ソファで猫が寝ている。

落ちている新聞の日付は「２０３０年１２月２４日」。

○こころメンタルクリニック　外観（夕）

小さな病院。

「こころメンタルクリニック」と言う看板がある。

○同　待合室（夕）

小さな待合室。

受付には看護師2、3がいる。
5名程の患者が待っている。
診察室のドアに「副院長　園田春香」
と書かれたプレート。

○同　診察室　中（夕）
ソファやクッションがあるゆったり
とした空間。
春香（35）と柘植麻里（34）、スー
ツ姿の柘植徹（40）が、向かい合っ
て座っている。
柘植、貧乏ゆすりをしながら腕時計を
見ている。
柘植「すみませんが、すぐ会社に戻らないと
いけないんです」
春香、柘植の様子をじっと見ている。
麻里、びくびくしている。
柘植「妻の、何ですか？　病気の事はお任せ
してますから。それよりお前、優香の迎え
いいのかよ？」

麻里「あ、あの」
柘植「ったく、子供ほったらかして。ほんと、要領得なくてすみませんね。はは、子供にも移ったらどうするんだって」
春香、机をどんと叩く。
柘植、驚いて貧乏ゆすりをやめる。
春香「すみません。虫が」
春香、手の甲をかく。
柘植「はぁ」
春香「今日、旦那様にも来ていただいたのは、奥様の病状のご説明と、今後の治療方針についてお話しさせていただこうと思いまして」
柘植「はいはい。治療ねぇ。だるいだとか辛いだとか言って。甘え病って言うんですかね。あはは」
春香「奥様の病気の原因は、旦那様のその態度です」
柘植「は？」
春香「旦那様の威圧的な態度に、奥様は不安

を感じておられるんです。その事について
どう思われますか？」
柘植「はぁ……」
柘植、腕時計を見る。
春香「今日はじっくりお話させていただきます。会社にはすぐに戻れない事、ご連絡していただいてもいいですか？」
春香、毅然とした態度で柘植を見つめる。

○同　待合室（夜）
患者はおらず、看護師2、3は片づけをしている。
春香、診察室から出て来る。
春香「ごめんなさい、遅くなっちゃった」
看護師2、笑顔で首を振る。
看護師2「お疲れ様です」
看護師3「先生、これから一杯どうですか？」
春香「え？」
看護師3「ほら、クリスマスイブだし。独身

三人でぱーっといきません？」
春香「あー、ごめん。これから例の学会の合同発表の準備があるから」
看護師2「えー！ クリスマスイブなのに？」
春香「忙しい先生ばっかりだから、こういう日が一番集まりやすいのよ」
看護師2「そんなぁ」
春香「楽しんできてね」
春香、白衣を脱ぎながら診察室に戻る。

○橋（夜）
川の上にかかる橋を、春香が足早に歩いている。カップル達が腕を組んで歩いている。
春香の視界に、突然赤い風船が飛んでくる。春香、驚いて一瞬手を伸ばすが、間に合わず風船は飛んでいく。
男の子の声「あーママ、風船飛んで行っちゃった」
春香、橋の下を見る。

○河川敷（夜）

クリスマスマーケットが開かれており、賑やか。

その中にいる、５歳ほどの男の子が、残念そうに空を見上げている。

男の子と手をつないでいるのは美織（４２）。春香、はっとして目を見開く。

男の子「パパー」

○橋（夜）

春香、男の子と美織を見つめている。

男の子に駆け寄って来たのは、遠山（４３）。

男の子と美織、遠山は手をつないで飛んで行った風船を見つめている。

遠山は春香に気が付いていない。風船を見つめる遠山の顔は幸せそう。

三人は手をつなぎ、歩いて行く。

春香、その姿をじっと見つめる。

空を見上げると、赤い風船が夜空に消えていく。

春香、前を向き、颯爽と歩き始める。

了

２００字詰原稿用紙換算２２５枚